

団塊のカタログ

トシタロー・グラフィティ

陸カツに続く給食シリーズ第2弾である。

ユニセフさん ありがとう

ユニセフはUNICEF (United Nations International Children's Emergency Fund = 国際連合児童基金) のことで、世界中の困っている子供たちを救うのが仕事である。

戦争 をするのは大人の勝手に、子供には罪がない筈だが、今のコソボ紛争、先の湾岸戦争、その前のベトナム戦争がそうであったように真つ先に犠牲になる。

太平洋戦争が終わっても、戦争中と同様に日本には食糧が不足していた。

そんな状況は学校でも同様で、弁当を持って来られない子供たちは少なくなかった。

父親が戦地から帰ってこない、家が貧しいなどの事情によるものだが、せめて学校だけでも子供たちにひもじい思いをさせないようにと、**昭和22年10月**に連合軍総司令部は学校給食用として**脱脂粉乳**の放出を決定した。

ドラム缶の大きさの厚いボール紙のようなものでできた、怪しげな梱包で湯島小学校の給食室にドーンとトラックで運ばれてきたもので、これがお湯に溶かされて牛乳にヘンシンして登場してくるというわけだ。

いつ頃からホンモノの牛乳が給食用として採用されたのかは知らないが、今でも牛乳が嫌いな子供も大人もゴマンといる。そもそも牛の乳の分解酵素は根本的に人間のとは違うから、飲み過ぎれば確実に下痢になる。ましてや牛乳モドキは。

好き嫌いは良くないとしても、こと牛乳に関しては体質も関係してくるから、たとえ飲めなくても恥でも罪でもないが、食糧不足の状況下ではそんなことはいってられない。

そこからスタートしたミルク給食、これだけ飲んでいれば死ぬことはないほどの完全食品で、単品としてはタマゴと並んで滋養豊富(これも古い)の点では申し分ない。

ではどこが問題なのかと言うと、早い話が**マズイ**のだ。それも超がつく。

その為、**恐怖のミルク給食**などといわれたくらいで、アツアツだとそうでもないが冷めようものなら胃検査用のバリウムも真つ青、そこへもってきて給食のオバさんが手を抜いて沸騰させた日にはなんともコゲ臭い。

かてて加えて、犬のエサ入れのようなアルマイト容器も不評の一因であった。

落しても割れなくて丈夫で長持ちするのはいいのだが、カネつばくて口当たりが悪いところにもってきて、もともと薄いものを繰り返し大ざっぱに洗っているものだからベコベコにへこんでいる。

ホットミルクなんてものは、陶器のカップの取っ手に指を突っ込んでフーフーいつて飲むからおいしいのであって、ボコボコで薄っぺらでカネつばいアルマイトの容器になみなみとつがれた焦げ臭い粉ミルクがウマくもなんともないのはトーゼン、**恐怖の粉ミルク**の表現は的はずれでも大げさでもない。

そのミルクだが、デカイバケツにドーンと入れられて各教室に配られ、それを給食当番が皆のアルマイトのエサ入れにつぐ。

「少しでいいわよ。あーっもう、こんなに
いらないのにい」「あまり入れんなよ。この
ヤロー、オレにウラムでもあるのか!」とそ
りやモウ大騒ぎだった。一人一人に少なくつ
げば、ミルクは余って残って捨てられる。

これはマズいというので、しまいには先生
が給食当番になったりして不正ミルク一掃に
乗り出した。皆のイヤな顔にもひるむことな
く、ニヤツと笑ってドバツとつく。

もともと骨張っている顔ゆえ**北京原人**なる
アダ名をつけられていた先生が愛想笑いをす
るものだから、なんとも気持ち悪い。

女子には少なめについでいたようだったが
気のせいだろうか。

こんなこともあった。「沢間くん、もっと
欲しいでしょ?」と、近くの席の女の子がネ
コなで声でおすそ分けしてくれるのだ。

実はワシは味音痴で、皆がイヤがる粉ミル
クもそんなに苦にならなかったものだからこ
んな時だけモテたりして、またオダテに乗り
やすい性質も女どもにバシていた。

小さい頃から女にはだまされっぱなしだ。
給食当初の**ユニセフさん**ありがとう
は本当に食べ物に困ってい
た**昭和22年**からせいぜい**25年**頃までのこと
で**もはや戦後ではない**といわれた**30年代**ともな
ると粉ミルク給食はすでに**ありがた**なしのた
だの**メイワク**に落ちぶれていた。

配給以外の食糧を拒否し続けた東京地裁の
山口良忠判事が餓死し、電気も割り当て制だ
った頃とはすでに時代は変っていたのだ。

力道山がシャープ兄弟を空手チョップでや
っつけ、街頭テレビの前には応援する人たち
で黒山の人だかりになり、洋モノ音楽はマン
ボから口カピリーへ、ひばり・チエミ・いづ
みの初代三人娘も登場し、映画は「ゴジラ」
や「七人の侍」が封切られ、日本全体が明る
さを取り戻そうとしていたのだ。

朝鮮戦争をきっかけに景気は上向き
だったからだが、昭和から
平成に改まって10年もすぎ、給食にはホンモ
ノの牛乳が出されるが、それでもあまり好か
れていないようで、我々の頃と同じように流
しに捨てていると聞く。

テレビなどで五十デコボコの評論家もとき
が「近ごろの子供は食べ物を粗末にしますね
エ」なんてエラソーに言うのを耳にするとフ
フンと笑ってしまう。アンタだってその頃は
ミルクを捨てていただろうし、今でも宴会な
んかでドバツと残すじゃないのって。

それは指導する立場の文部省の役人にもい
えて、**給食は教育の一環**などといってもちつ
とも説得力がないのもトーセンである。

運動会と揚げパン

小学生の楽しみと言えば、今も昔も運動会
と遠足であろう。小学校に入つてすぐの春の
遠足は築地市場のすぐ隣にある旧浜離宮庭園
略して浜離宮であつたが、ワシは**ハマリきゅ**
うではなく**ハマリきゅ**と読んでいたのだ。

今日は良いお天気に恵まれ、皆さんが**待ち**
に待った……こんなワンパターンで当時の鈴
木修山校長は生徒を送り出していたのだが、
この**待ちに待った**を**町に待った**だとばかり思
い込んでいて、なんでワシらの遠足を**町**の人
たちが待っていたのだらう、と不思議でしょ
うがなかった。このテの勘違いは結構多い。

♪ウサギおいしあの山**♪**は**ウサギがおいし**
かったであり、**♪忘れがたき故郷♪**を忘れる
ことは**カタキ**なのだとはばかり思いこんでい
たのはそんな昔ではない。

遠足もそうだが、運動会の朝はいつも
より早く目がさめる。洗いたての
体操服を着て、いつもより早く登校する。

ワイワイ・ガヤガヤと教室は騒々しい。

窓から外を眺めると、もう家族は校庭に陣を張っている。あ、いるいる！……自分の家族をいち早く見つけた子供たちは実にうれしそうだが、だれも来ないのがわかっている子は心なしか元気がない。

ワシの父親は仕事一筋人間だったから、学校に顔を出したことは一度もない。

もともと、この頃は貧しい家族が多かったし、父親が母親のいない子供もいたから、そんなに深刻ではなかった。

むしろ、子供心に男は大変だなあと思ったりしたものだったが、いざ自分が社会に出て家庭と子供を持つ立場になってみると、仕事は言い訳にすぎないことがわかった。

誤解を恐れずにあえていうなら、真面目に働いているフリをしているか、真面目にしかできないだけの日本人は実に多い。

勤勉はバカの埋め合わせにはならないし、勤勉なバカほど他人迷惑なものはない。

良い仕事ができる」とよく仕事をするとはダービー馬と未勝利馬ほどに違うのだ。

個人的 事情はさておき、親が来なくても運動会は進行する。まずは胸を張って拍手を受けて堂々の入場行進だ。

国旗掲揚、国歌斉唱、校長先生の「待ちに待った…」のお話がおわればいよいよだ。

ラジオ体操から始まるのだが、小学校の運動会は6学年合同でやるものだから、そもそも出番が少なく待ち時間がやたら長い。

……トーゼン退屈である。

そんな時はポケットと空をながめていた。

青い空にぽつかり浮かんだ白い雲が風の動きに流されて行く。上空と低空とで、灰色と白い雲とで流れて行くスピードが微妙に違うから、まるで追いかけてっこしているように見えるのが楽しい。

実は今でもそうだが、一つのことに熱中するのが苦手で、運動会も例外ではないのだ。

午前中 などは早く昼休みにならないかとそればかり考えていた。

お目当ては運動会用の特製**あげパン**だ。

堅くて味がなくてボソボソのコッペパンも油で揚げるとこれが結構イケる。

パン皿のはしに砂糖がほんのちよつと盛られていて、これをなすりつけて食う。

この**あげパン**が好物だったご学友は多かったはずだが、それだけではないのだ。

いつものミルクに代わって、なぜか砂糖入りの紅茶がついてくるのだ。

アルマイトの器は相変わらずだが、それでもこっちの方がはるかにおいしかった。

副食一品も、ふだんよりチヨイと良いものが出てくる。(何しろ肉入りだったもの)

あげパンそして**鯨カツ**……これ以上美味なるものにはその後めぐりあえないでいる。

境内のフレイボール

中学校の世界地図の中に、色分けされた世界の宗教分布図があった。

ヨーロッパを中心にキリスト教が、アラブ周辺にイスラム教が同じ色で塗られていた中で、日本だけが赤になっていた。

我が国の宗教はてつきり仏教だとばかり思っていたが、これが実は神道(しんとう)で意外に思ったものである。

ワシ は湯島天神の氏子らしいので、この地位を悪用して境内でよく遊んだものである。お社の裏手にはちよつとした広場があつて、ここがワシらの野球場なのだがバットは使わないし、使えない。

飛びすぎてボールが行方不明になってしまうからで、そうすると試合にならない。車道に飛び出すホームランはアウトなのだ。

そこで、ボール一つあればどこでもできる**ゴロ野球**が考え出された。

この頃、おもちゃ屋か文房具屋か駄菓子屋がどこにでもあって、1コ10円のゴムボール（軟式テニス球もどき）を売っていた。

道具はこれだけで、バットもいらぬ。

まず、ホーム・ベースの位置を決める。

ベース板なんかないから、足元の地面を五寸釘で引っかく。ラインも同様である。

準備はこれだけだ。

次にチーム編成にとりかかる。

幾つか方法があるが当時最もポピュラーだったのが**グーパー・ジャン**だ。

グーツ、パーツ、と掛け声よろしくジャン！で一斉にグーカパーを出し、グー・チームとパー・チームにわけぬ。

ぴったり半分ずつにはならないから、その場合は多い方のチームが普通のジャンケンをして、負けたヤツをトレードに出す。

ちなみに、2で割り切れない場合は一番ヘタなのとその次にヘタなヤツの2人で一人前にしていたのである。（実はワシも…）

単純明快で良いのだが、実は重大な欠陥がある。1回でケリがつかぬのと、不正が行われやすいのだ。

王クンと長嶋クンがいつもグーを出せば、2人はいつだって一緒にプレイできちゃう。

うまいヤツ同志がくつついたりで、そうすると面白くもなんともない。そこで考え出されたのが2人ジャンケンである。

2人1組になって普通のジャンケンをやつて、勝ちチームと負けチームにわけぬのだ。

それも同じような実力の者同士で組んでやるから、戦力は平均化する。

しかも勝つた方のチームがそのまま先攻することになっていたから、改めて先攻・後攻を決めるジャンケンをする必要がない。

これなら戦力均衡と不正防止だけでなく時間の節約にもなる。

極めて合理的かつ論理的なので、大体この

システムでチームと先攻を決めていた。

さて、先攻チームは打順を、後攻チームは守備位置を決めなくてはならないが、これはあまりモメない。

勝ちたいのはお互いさまだから、優秀な選手は実力にふさわしいポジションに付く。

秀才組は投手と捕手と内野、1番から5番までを独占し、与太郎組は残った外野と6番以下を押しつけ合うのだ。（ワシがこつちであつたことはいうまでもない）

このあたりのミニクさは大人になってからもあまり変わらないが、前出の実力主義は子供の時の方がよっぽどシビアである。

私情のはびこる余地はないのだ、

ゴロ野球はボーリングのようにゴロで投球する。

柔らかいゴムのボールだから、ギュッと握りつぶして手首を返せば微妙な回転が付き、カーブにもシュートにもなる。

これを打者は腰をかがめ、平手で水平にピントの要領で打つのだが、指先を折り曲げたり、しゃくり上げたりしてはいけない。

これが結構むずかしくて、なれないと地面に手をぶち当てたり、ボールの上つ面をひっぱたいてすつ転んだりしてしまう。

いつの時代でも、どこの国でも、子供は与えられた条件の範囲でうまく遊ぶものだ。

ワシの世代もそうだったのだが、それも今は昔、ビー玉やおはじき

やナワとびや軍事将棋やトランプや花札も楽しかったけど、今じゃ団体旅行のバスの中でチンチロリンとピンゴだ。

あの頃は良かったなアなどとキレイごとをいうつもりはない。40年前にファミコンやブレステがあつたら間違いなく日和っていたはずで、セコい境内のゴロ野球より室内で一人でも対戦モードでもできる「ファミコンスタジアム」の方が面白いに決っている。